パシフィック・リムの大学図書館を訪ねて
——カリフォルニア大学図書館システム視察

宮　内　智　代

はじめに

大学から出張費をいただく機会に恵まれ、2001年3月11日から17日にかけてアメリカ西海岸に滞在し、カリフォルニア大学9校のうち、バークレー校（UC Berkeley）とロサンゼルス校（UC Los Angels ）の図書館および、日本またはアジア関係の研究図書施設を視察しました。今回の視察は保存図書館システムとオンラインカタログを中心に研究図書館のあり方を学ぶことが目的でしたが、他にもいろいろと考えることが多い出張でした。以下にその一部をご報告し、今後のセンター図書室の運営業務に役立てたいと思います。

UC Berkeley

まず、3月11日の夕刻にバークレー校のあるカリフォルニア州バークレーに到着しました。バークレーはサンフランシスコ国際空港から車で約1時間ほどの距離にあります。宿泊したホテルの窓からは大勢の学生が重そうな教科書を腕に抱えて道を行き来するのが見えますし、遠くには60年代の学生運動の象徴であったと聞く、セイザー・タワーが見えます。全米でも有数の研究大学として知られるバークレー校を訪問した気持ちがたかまりました。

翌日12日から早速視察を開始しました。はじめに緑に囲まれたバークレー校のキャンパスの西端にある、日本研究センター（Center for Japanese Studies）を訪問して、客員研究員であり香川大学助教授でもある岡田哲太郎先生の案内で、センターの施設を見学しました。1958年に設立されたこのセンターは、大学内における日本についての教育や研究をサポートしています。具体的には、日本研究を専攻する学生に日本研究に関する施設や授業の案内をするほか、日本に関連したトピックで、セミナーや講義などを定期的に開催します。また、毎週火曜日には、日本についての小セミナーがひらかれ、関心のある学生は誰でも自由に参加することが出来ます。後に述

UC Berkeley　東アジア図書館

べるように、バークレー校はカリフォルニア大学の中でも日本研究の中心的な位置を占めていて、その分センターの負う役割が大きいとうかがいました。

続いて東アジア図書館（East Asian Library）を訪問して、カリフォルニア大学の図書館全体やバークレー校の図書館システムと東アジア図書館についてのお話を、同図書館のライブラリアンである石松久幸さんから詳しくうかがいました。全米有数の研究図書施設として知られるバークレー校の図書館システムはどのように運営されているのか。私には興味の深いお話が幾つもありました。

カリフォルニア大学は周知の通り、州立（＝公立）の大学であり、したがってその図書館施設は州民にひろく開放されています。カリフォルニア大学の構成員ではなくても、州民であれば個人・法人を問わず資料閲覧やコンピュータ端末からの情報検索など、図書館の施設を自由に利用することが出来ます。本の貸借を希望する場合は、年間100ドルでライブラリーカードを作成することが必要です。本の貸出冊数に制限はありませんが、貸出期間は学生や教官などライブラリーカードの資格によって異なります。他のアメリカの大学図書館の多くと同様に、本を紛失した場合や延滞した場合は罰金が課されます。州民以外の人でも、図書館施設の大部分は出入りがフリーパスですので、自由に資料を閲覧することができます。セキュリティチェックのある書庫への入館を希望する場合でも、IDカード等で身分を証明することができれば入館が許可されるそうです。

肝心の図書館の蔵書数ですが、カリフォルニア大学全体で約4,000万冊、バークレー校では約900万冊の図書を所蔵しています。

カリフォルニア大学の9校の各図書館は基本的にはそれぞれ独立に組織、運用されています。ただし、カリフォルニア大学全体で構築されている部分もあります。たとえばデジタルリソースを管理運営する組織である、California Digital Library（CDL）[1]や、本を保存するための保存図書館が、共同で運用されています。

上に触れたCalifornia Digital Library（CDL）をここで説明します。これは、1997年に「壁のない図書館」を目指して構築された新しい組織です。個々に独立していた9校の図書館のリソースとサービスを有機的に結び付け、利用者に対する利便を図ることに目的を置き、UCキャンパスや、関連する研究所などから集められた精鋭スタッフが仕事を請け負っています。その業務の主たるものは、カリフォルニア大学全体のデジタルリソースコレクションの保存や、物理的に膨張するライブラリーのコレクションを管理するための新しい技術の研究と応用です。近年はレファレンスや新聞、また古い劣化の進んだ資料などのデジタル化が進んでいますが、これらのデジタルリソースは、本を管理するために作られた従来の図書館の枠組みを大幅に拡張しなくては管理することはできません。これからの研究図書館はデジタルリソースを含む新しい蔵書管理の方法を研究・開発していく必要があるのです。

CDLの中核をなすものとしてOnline Archive of California（OAC）[2]と呼ばれるデジタルアーカイブがあります。これは、カリフォルニア大学およびカリフォルニア州に存在するライブラリーや、美術館、公文書館などが所蔵している、マニュスクリプトや写真、アー

---

[1] http://www.cdlib.org/

[2] http://www.oac.cdlib.org/

ト関係の研究など、様々な形態のコレクションへのアクセスを提供するデジタルインフォメーションをデータベース化したものです。また、アクセス情報だけではなく、部分的にデジタル化されたコンテンツも収容されています。たとえば著名な作家の手書き原稿など、今までは直接来館しなくてはなかなか見ることが出来なかったコレクションが、データベースを利用して検索、閲覧することができます。

OAC の開発に関しては、そのフレームワークの作成については UC Berkeley のライブラリアンが、またコンテンツのフォーマットの作成については、UCLA の Special Collection Department のスタッフが主力になって開発したとうかがいました。OAC の素晴らしい点は、データベースがある特定のコレクションのためでなく、カリフォルニア大学全体で利用できるよう、いろいろなコレクションを想定して設計されている点です。汎用性が高いと言い換えれば良いでしょうか。ですからOAC の各コンテンツの作成はそれぞれオリジナル・コレクションを所蔵している各図書館等が行うわけですが、その際各図書館は OAC のフレームワークとフォーマットにそってコンテンツを作成するだけでよく、コレクション毎にデータベースを設計する必要がないのです。これにより図書館側は少ない手間でコレクションをデジタルアーカイブ化することができます。また利用者には、同じ検索システムで多くのコレクションを検索できるメリットが生まれます。デジタルアーカイブの一部は、インターネット上で一般公開されており、世界中どこからでもアクセスすることができます。ライブラリー・コレクションの有機的な結び付きを可能とするこうした図書館相互の連携は、日本の研究図書館でも今後ますます重要になるのではないでしょうか。

図書館相互の連携はデジタルアーカイブ以外の部分でも進んでいます。たとえば CDL のサービスの1つであるオンラインデータベースの Melvyl Catalog[3] では、カリフォルニア大学図書館全体の図書を検索することができます。Melvyl がつくられる以前にも各校それぞれ、独自の目録データベースを構築していましたが、Melvyl を利用することで、一度の検索で各校すべての目録を検索することができるようになりました。また検索だけでなくカリフォルニア大学の構成員であれば、各大学間の相互貸借に相当するキャンパスローンをこの Melvyl のサイトから申し込むことも可能です。たとえば、検索した結果、目的の本が自分の所属するキャンパスになかった場合は、検索結果画面に表示される「Request」ボタンをクリックすることで、簡単にキャンパスローンを申し込むことができます。そして早ければその日のうちに自分が希望する最寄りの図書館に本が届く仕組みになっています。

各大学が共同で使用できるこれらのオンラインデータベースのほかに、各キャンパスには独自のデータベースがあり、たとえばバークレー校の場合は GLADIS Database[4] というオンラインカタログがあります。Melvyl では UC 図書館の所蔵する本をキャンパス単位で検索することはできますが、個々の図書館のみを対象にした検索はできません。一方 GLADIS の場合は、キャンパス内にある図書館毎に限定した検索もできるので、たとえばバークレー校東アジア図書館の蔵書のみを検索したいなどという場合には、こちらの

---

[3] http://www.dbs.cdlib.org/

[4] http://sunsite2.berkeley.edu:8000/

GLADIS Database の方が便利です。また、図書の貸出の更新もオンラインからできるなど、バークレー校に限定したいくつかのサービスがこの他にもあり、これはバークレー校に限らず、他校も GLADIS のような独自のシステムを構築しています。Melvyl でカリフォルニア大学全体の共有サービスを提供し、GLADIS のような個別データベースにより、各校の事情に合わせた細かなサービスを利用者に提供するカリフォルニア大学の図書システムは、日本の国立大学には少ない細やかなものになっているのです。

続いて視察のもう一つの焦点であった保存図書館について説明したいと思います。カリフォルニア大学は傘下の 9 校を地理的に北と南の 2 つに分け、南北に 1 つずつ保存図書館を建てています。収容量においては北と南を併せて約 700 万冊の図書を保存する事ができ、空調設備やセキュリティにも十分な配慮をしています。ちなみに UC バークレーは北区域のグループに属していて、ほかに、UC San Francisco、UC Davis、UC Santa Cruz の 3 校が北区域に属しています。北区域の保存図書館は Northern Regional Library Facility (NRLF) と呼ばれますが、この保存図書館には、自館の配架スペースの不足から保存することが出来なくなったなどの理由で区域内の各図書館から送られてきた資料が保管されています。保存図書館へまわす資料の選定は各図書館の判断にまかされていますが、主には利用頻度の低い本や雑誌のバックナンバーが収容されるそうです。また、資料を劣化させないための空調設備が完備されていることから、劣化が心配される貴重資料なども保存図書館に収容されています。一度保存図書館に収容された場合でも、利用頻度が高い場合などは、もとの図書館に戻されるケースもあり、個々の図書館の事情により柔軟に保存図書館を活用することが出来ます。保存図書館での図書の配架は DDC などの一般的な分類方法にはよらず、本のサイズで分類され、配架場所が決定されます。これは、できる限り無駄なスペースをなくし、効率よく本を収納するための工夫です。同じく限りあるスペースを有効に利用するという観点から 1 つの保存図書館には同じ図書は 1 冊しか保存しません。この場合、北と南は別の保存図書館ですので、両方の図書館に 1 冊ずつ同じ図書を入れることが出来ます。保存図書館にすでに収容されている本が不要になった場合は、キャンパス内にあるブックストアで古本として処分されます。保存図書館に収容された図書は元来の図書館の ID の他に保存図書館用の ID がつけられ、この 2 つの ID により管理されます。保存図書館に収容された資料であっても、普通の資料と同じように OPAC から検索することができますので、利用者は検索時に保存図書館を意識する必要はありません。利用者は必要な本が保存図書館に収容されていると判った時点で、即座にキャンパス内のライブラリー・カウンターから利用を申し込むことができます。キャンパスによって保存図書館までの距離が違うため、本を入手するまでの時間がキャンパスごとに異なりますが、ふつうの資料であれば申し込んだ本が 2 日以内にライブラリーに届きます。また、NRLF に直接出向いて本を閲覧することも可能です。この場合、キャンパスから NRLF へ 1 日に 10 本バスがでているのでこれを利用することができます。保存図書館に収容されてしまったからといって、その本が何か特別なものになってしまうのではなく、なるべく利用者が不便に感じないよう、さまざまな工夫がなされているのです。日本の大学図書館も、書架スペースの不足は問題になっています。各地で保存図書館の運営を早急に研究する必要があるのではないでしょうか。

バークレー校に関しもう一つ興味深くお聞きしたものに、ティーチングライブラリーが

あります。ティーチングライブラリーは資料を提供するのではなく、資料を利用するための情報や、情報を得るためにツールを修得するためのセミナーを提供します。これは年々増加するライブラリーのデジタルリソース、およびそれを活用するための検索ツールや管理技術の複雑化に対応していくために出来たライブラリーです。このライブラリーの創設には、現在ティーチングライブラリーのヘッドを務める Ellen Meltzer さんの個人的発想と尽力が大きく寄与したそうです。近年バークレー図書館ではこのティーチングライブラリーに大きな力を入れています。ここでは学生対象のセミナーはもちろんですが、教職員対象のセミナーも数多く企画され、それには一般の人も参加することができます。定期的に何種類かのセミナーが開催されているため、誰でも自分の都合の良いときに必要なスキルを身につけることができる利点が何よりです。また、セミナーの講師はライブラリアンの方が務めますが、ライブラリアンももちろんセミナーに出席できます。めまぐるしく変化する図書館のデジタル化に対応するためには、ライブラリアンも絶えず新しい知識や技術を修得していく必要があるのです。デジタル化の波が押し寄せる以前、ライブラリアンは比較的個人のスキルで目録をつくり、本を整理していました。しかし現在は資料のデジタル化が進み、技術は日々進歩し、個人のスキルですべてをカバーすることは難しくなりました。資料情報がさまざまにリンクすることで活用されるように、個人の知識やスキルも他の人とリンクして活用されていくことが重要になる、つまりはチーム・スキルの向上が今後の研究図書館の重要な責務になっていくのではないかと思われます。駒場のアメリカ太平洋地域研究センターでもリサーチデータベースの講習など行ってきましたが、まだ十分ではなく、高価なデータベースが十二分に活用されているとは言い難い状況です。図書館のチームワーキングをどう発展させるのか、今後の重要な課題です。

ところで、バークレー校のそのチームを造る方々の規模と内訳ですが、バークレー校図書館全体では約530人の職員の方が働いていらっしゃいます。そして、その内の約130人が専門職員（ライブラリアン）です。以前、専門職員は200人程度いましたが、大学全体のリストラにより、その数は減ってしまったそうです。

カリフォルニア大学の図書館全体について以上のように説明していただいたあと、引き続き石松さんの実際の職場である、東アジア図書館についても案内、説明していただきました。

バークレー校東アジア図書館は中国、日本、韓国、モンゴル、チベットに関する本を中心に約85万冊の書籍を所蔵しています。そのうち、日本語の本は約35万冊です。これは日本以外の世界の大学図書館のなかで最大規模を誇ります。東アジア図書館のスタッフ数は35人ですが、そのうち日本人のスタッフが10人いらっしゃいます。先に紹介したとおりバークレー校における日本研究はカリフォルニア大学全体の日本研究の中心的役割を担っています。蔵書数とスタッフ数とがその地位をよく示しているでしょう。学生、教官の研究内容は、文芸、語学関係の研究がかつてはほとんどだったそうですが、最近は、アニメーションやジャーナリズム、建築など興味の分野が多岐にわたり、またより専門的になってきたと聞きました。そのため、以前のように文芸関連の図書のみを選書対象とすれば良いというわけにはいかず、購入する図書の選書が難しくなっているそうです。もちろん利用者からリクエストがあれば、一冊ごとに本を購入することになりますが、それ以外にも大学内の各種研究会などに積極的に参加して、教官や学生の研究内容や必要とされる資料の

情報を積極的に集めることがライブラリアンの重要な仕事の一つになっていると説明を受けました。戦後日本研究が一番盛んであったのは日本のバブル期です。この時期多くの学生が日本研究を専攻しました。ですが、将来のビジネスにつながるからといった、日本あるいは日本人に対する興味とは違う二義的目的から日本研究を選択する学生が多かったため、底の浅い研究が多かったそうです。現在、アジア研究の主流は中国に移っています。アメリカからみて現在、中国が一番重要な国になっていることのあらわれかもしれません。その反面、新たに日本研究を専攻する学生は流行やファッションといった表面的な嗜好ではなく、日本の文化や歴史の編成そのものに興味を持って日本研究を専攻する学生が多くなっています。先ほども触れましたが、そうした熱心な最近の学生たちからの利用図書に関するリクエストは数も増え、内容も多岐に渡るようになりました。東アジア図書館が35万冊の蔵書を誇るとはいえ、あらゆる日本語の文献や、情報をそろえられるわけではありません。そのため、アメリカ国内の他の日本研究ライブラリーと、密接に連絡をとりあい、相互に協力することで、日本を研究する研究者の支援につとめていると聞きました。

UC Berkeley Moffit and Doe Library

UC Berkeley Doe Library

最後に、バークレー校のメインライブラリーであるDoe libraryのライブラリアンであり、副館長であるIsabel Stirlingさんに、Doe libraryおよび、Moffit Libraryを案内、説明していただきました。Doe Libraryは大学キャンパスのほぼ中央に位置して、研究ライブラリー兼バークレー校図書館全体の事務棟といった建物です。また、その横にMoffit libraryという、学部学生のための図書館があり、こ

の2つの図書館は地下で結ばれています。この2つの建物を結ぶ地下部分は通路としての役割もありますが、おもに書庫および閲覧スペースとして活用されています。日の光があまり入らない地下は図書の保存スペースとして最適なだけではなくまた、Moffit Library と Doe Library から地下スペースへの入り口2カ所にセキュリティデスクを置くことで、人の出入りを管理することができ、貴重資料の盗難も防ぐことができます。閲覧スペースの各テーブルには、LAN ケーブルが引かれていて、学生は自分のノートパソコンを持ち込んで自由にインターネットを利用することが出来ます。私の視察したときも何人かの学生がノートパソコンを真剣な顔つきで覗いていました。Doe Library の中には先ほど石松さんに説明いただいた、ティーチングライブラリーのセミナールームもあります。実際のセミナールームは壁の一部がガラス貼りになっているため、中の様子がよくわかり、誰でも気軽に入れる雰囲気になっています。

石松さん、Isabel Stirling さんともお忙しい中、丁寧にカリフォルニア大学の図書館システムを説明してくださり、感謝の気持ちを深くしました。翌日も、独自に各図書室やコンピューター検索室に足をはこび学生の学習の様子や図書館サービスの提供の様子を視察しましたが、その規模、質ともにさすがにバークレー校ならではのものと感心させられるばかりでした。

UC Los Angels（UCLA）

バークレー校の素晴らしい図書館施設を視察した後、3月14日に今度はロサンゼルスにあるカリフォルニア大学ロサンゼルス校の図書館を訪問しました。すでにカリフォルニア大学図書館全体のシステムについてはバークレー校で詳しい説明を受けましたし、その内容は紹介しましたので、ここでは UCLA の図書館に関する固有の特徴だけを簡潔に説明いたします。

UCLA のキャンパスのほぼ中央には Powell Library と呼ばれる図書館があります。この Powell Library のなかに学部図書館が入っています。このほか、人文社会科学系の研究図書は、キャンパスの北端にある Young Research Library（YRL）の中に集められています。自然科学系の研究図書は各学部が独立した建物をもっていて、キャンパス内に点在しています。さらに、Other Campus Collection という、UCLA Library とは予算の系統が違う図書館も大学内に幾つかあります。それらを全て合わせた UCLA 図書館の蔵書数は720万冊にもなります。このような広大で複雑な組織をもつ図書館を効率よく視察するために、上に紹介した Young Research Library（YRL）内の東アジア図書館（East Asian Library）でライブラリアンをなさっている Toshie Marra さんをまず訪問して、UCLA 図書館全般と東アジア図書館についてのお話をうかがうことにしました。なお本題からはずれますが、最初に面白いことをひとつ紹介すると、UCLA 図書館には最近 Library Mug と呼ばれるものが導入されました。これは UCLA Library の中で飲み物を飲むための UCLA Library の公式マグカップです。実物は惜しくも写真に取り損ねましたが、コーヒーやジュースがこぼれないようにフタが工夫されたプラスチックのマグカップです。UCLA 内のレストランやコーヒーショップでこれは販売されていて、このカップであれば UCLA 内すべての図書館に飲み物を持ち込むことができます。利用者の利便を考えたいかにも UCLA らしい話だと面白く思いました。

本題に戻ります。先ほど、バークレー校の図書館を説明した際に北区域の保存図書館を併せて詳しく説明しましたが、一方の南区域の保存図書館はこの UCLA のキャンパス内にあります。これは Southern Regional Library Facility（SRLF）と呼ばれます。ここには UCLA、UC Irvine、UC Riverside、UC San Diego、UC Santa Barbara の合計 5 校から送り込まれた本が保管されています。SRLF の特徴は北区域 NRLF と基本的に同じで、空調設備が整っていること、セキュリティがしっかりしていること、また図書の配架は図書のサイズによって決まることなどです。UC Berkeley の場合は NRLF はキャンパスから少し離れたところにありましたが、SRLF はなんと言っても UCLA キャンパス内にありますから、朝 11 時までに申し込めば午後 4 時までには、申し込んだ本が利用者の手元に届きます。SRLF に保管される本の種類をうかがったところ、やはりまず利用頻度の低い本だという答えが返ってきました。また、保存状態とセキュリティの面からレアブックスは積極的に SRLF へ送っているそうです。

次にパソコン端末からオンラインカタログを見せていただきました。UC Berkeley に GLADIS があるのと同じように、UCLA には ORION2[5] と呼ばれるオンラインカタログがあります。貸出図書の利用期限の更新や予約などのサービスを UCLA の利用者はここで受けることができます。また日本の大学図書館にはまだ広く普及していないサービスの中に、ORION Express と呼ばれるものを指摘することができます。これはロサンゼルス校のドキュメントデリバリーサービス（DDS）を指します。このサービスを用いることで、有料とはなりますが、早く確実に利用者は文献を入手することができます。たとえばこれを利用すれば、研究室まで文献を届けてもらうことも、海外にいる場合ならコピーをファックスで送ってもらうこともできるのです。さきほどは触れませんでしたが、バークレー校の場合も、Baker という DDS サービスがあると聞きました。豊富な専門スタッフが揃っていればこそ可能な緻密なリサーチサービスとこれらは言えそうです。

Marra さんが所属する東アジア図書館についても簡潔に説明します。この図書館は主に CJK 言語（中国語、日本語、韓国語）で書かれた文献を約 44 万冊所蔵しています。同じ分野の図書でも、欧米言語で書かれた文献に関しては、別途、リサーチ・ライブラリー（YRL）に収容されます。また、英語で書かれた文献のうちとくに基本的なものはさらに場所を移して学部図書館に入れられます。専門分野で分類するのではなく、まず言語で分類し、さらに教育目的に合わせて分配、所蔵するわけ

UCLA　東アジア図書館の掲示板

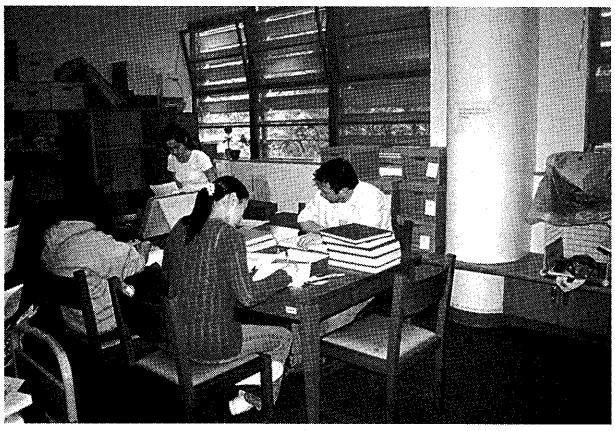
[5] http://orion2.library.ucla.edu/

です。東アジア図書館の中でも、中国語の本、日本語の本といったように言語毎にまず資料は分類されます。スタッフは15名でうちライブラリアンは5名です。日本人スタッフはライブラリアンを含み3名います。また東アジア図書館は、UCLAの中でもとくに保存スペースが不足している図書館であるため、蔵書の約3分の1が保存図書館に収容されています。また、雑誌のバックナンバーも配架スペースの不足からSRLFに収容されているそうです。Marraさんはそのことをとても残念がっていらしたのですが、研究のために緊急に必要になるケースの多い雑誌のバックナンバーを保存図書館に送ることができるということは、保存図書館がそれだけ便利に利用できることを示しているのではないかという印象を受けました。

YRLの2階にある東アジア図書館を見せていただいたあと、同じYRLの建物地下にあるSpecial Collectionsを見せていただきました。2000年にちょうど50周年を迎えたこのDepartment of Special Collectionsは、UCLAの所蔵資料の中からとくに貴重なコレクションを集めている、研究者にとっての宝庫です。たとえば、UCLAの教授であるユージ・イチオカ先生が収集した移民関係の資料である東アジア図書館のアビコ・ペーパーなどは、Japanese American Research Project Collectionの一部としてスペシャルコレクション化され、このDepartmentに所蔵されています。その内容を紹介すると、このアビコ・ペーパーには、移民一世であり、桑港『日米新聞』の編集長でもあった我孫子よな子の1891年から晩年1944年までの日記や1,000通を越す書簡を中心とする我孫子ファミリーに関連する資料が収められています。当時の日系移民事情を知ることができる一級の一次史料と言えます。また、我孫子よね子は津田塾大学創設者であった津田梅子の妹でもあり、津田梅子からの手紙もこのコレクションの中に数多く残っています。このほかにも代表的なコレクションとしてアルダインコレクションなどがあります。アルダインとはイタリアルネッサンスの巨人のひとりであるアルドゥス・マヌティウスが設けた印刷工房から出版されたレアブックスの総称ですが、UCLAではこれを積極的に収集していて、現在では北米で最も注目されるコレクションの一つになっています。またちょっと変わったコレクションに児童文学のコレクションもあります。このコレクションには1840年以前にイギリスとアメリカで出版されたものを中心とする古い絵本や児童書が収められています。Department of Special Collectionsにはその他さまざまな貴重なコレクションが集められています。これらのコレクションを見るためには閲覧用のカードを作成する必要がありますが、IDカードがあれば学外の方でも無料でカードを作成できるそうです。その開かれた図書館のあり方はバークレー校と同じでした。

なお、資料をスペシャルコレクションに含む基準としては、まず貴重資料であることが第一条件になりますが、そのほかに、各図書館の趣旨にあわないものがスペシャルコレクションとして収容される場合もあるとうかがいました。また、スペシャルコレクションは出版される場合もあり、Department of Special Collectionsにはその出版を仕事とする専任のエディターの方がいます。

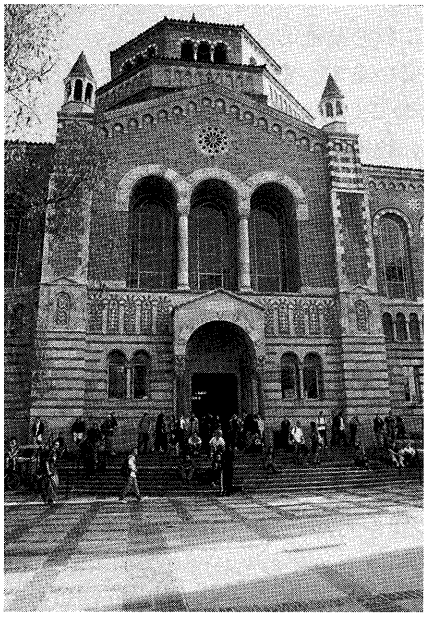
ここで先ほどバークレー校の項目で説明をしたOAC（Online Archive of California）に話しをしばらく戻してみます。OACはバークレー校の部分でも説明したようにCalifornia Digital Libraryの中核となるデータベースです。当然、UCLAのスペシャルコレクションの内容も、少なくともその一部はデジタル化されていてこのテータベースを通して検索す



UCLA Asian American Stadies Reading Room

ることができるのです。たとえば、先ほどの Japanese American Research Project Collection の中に、イシゴ・ペーパーと呼ばれるものが含まれます。これは、アーティストであった Estelle Ishigo に関わる個人的な記録です。彼女自身は日系ではありませんが、日系二世であった夫 Shigeharu Ishigo に同行し強制収容所を経験しています。このコレクションはデジタル化されていて、彼女がスケッチした強制収容所の様子などもすべてオンラインで見ることができます。この部分は、学外にも公開されておりますので、興味のある方はぜひご覧になってください。(注 3 参照)

貴重なコレクションを見せていただいたあと、Marra さんの案内で Asian American Studies Center Reading Room の Judy Soo Hoo さんを訪ねました。この図書室は UCLA 全体の図書館システムには参加していなく、先ほど触れた UCLA の Other Campus Collection の一つとして存在します。独立した建物をもつ図書館ではなく、研究棟の一角が図書室になっていて、そこに 10 人程度が勉強できる机と書棚が設置されているだけの小規模な図書室です。蔵書数は 2,500 冊と多くはありませんが、他の図書館ではなかなか入手しにくいアジアや太平洋地域に関連した新聞やニューズレター、パンフレット、雑誌記事などが数多く収集されコレクションされています。研究重視のこの部屋について触れましたので、母体である Asian American Studies Center が、UCLA におけるアジア・太平洋研究についての研究と教育の両面を担っていて、研究プロジェクトや教育プログラムを組むなど、さまざまな活動を行っていることも合わせて紹介しておきます。Amerasia Journal をはじめとして、



UCLA Powell Library

Asian American studies に関する刊行物を出版しているのもこのセンターです。

最後にすでに触れた Powel Library Building を案内していただきました。Powel Library Building は、古いイタリアの修道院を模した煉瓦造りの美しい建物で UCLA の代表的な建築物の一つとなっています。19 世紀末以来カリフォルニアにひろがったミッション・スタイルの建物に似たものを想像していただければ良いでしょう。地上 3 階、地下 1 階のスペースをもつこの建物には、学部図書館、Film & Television Archive、University Archives などの施設が入っています。学部図書館には個人がメールチェックや論文作成に利用できるコンピュータ端末が導入されています。たいへん広い自習室に、Windows や Mac の最新に近い機種がずらりと並んでいる光景はうらやましいかぎりです。プリンターはもちろんのことスキャナーや論文作成時に必要なソフトウエアなども用意されていて、学部レベルの人文社会科学系の論文であれば、Powell Library Building 内の資料と設備で十分作成できるのではないかと思われます。私が訪問した時期がちょうど授業の最終週で来週から試験が始まる時期であったため、席はすべて満席で学生が必死で勉強していました。バークレー校を訪問した時も感じましたが、カリフォルニア大学では、図書館とコンピュータリテラシー教育が密接に関わり合っているように思われました。ほかに、Film & Television Archive は文字通り、映画やテレビなどの映像資料を集めているライブラリーです。Hollywood が近いせいでしょうか、UCLA では、映像資料のコレクションが充実しています。南区域の保存図書館 SRLF にも多くの映像資料が収容されていて、とくに室温を低めに設定した巨大な保管庫があるそうです。また、University Archives は、UCLA についての記録を保存しているライブラリーです。UCLA について調べたいことがある場合、ここを訪れることになります。

全体としては、今回は自然科学系の各図書館を視察することが十分にはできませんでした。けれども、バークレー校でと同様、図書館のライブラリアンがお忙しいなか丁寧にしかも誇りを持って図書館の施設を案内してくださる姿が、UCLA でも印象に残りました。そのご親切に深い感謝の気持ちを記させていただきます。

終わりに

カリフォルニア大学バークレー校、ロサンゼルス校の両図書館を視察して感じたのは、利用者（＝研究者）とライブラリアンの距離の近さです。たえず、ライブラリアンが研究者を意識し、研究者の利便をはかる。そのことは、最終的にカリフォルニア大学から生み出される素晴らしい研究の数々に結びついているのだろうと思います。残念ながら日本の国立大学図書館の場合は、たとえば DDS など研究者に有利なシステムであってもなかなか導入できないことが多いようです。また、ロサンゼルス校の Marra さんうかがったのですが、ロサンゼルス校でも、大学全体のリストラによりライブラリアンの数が減ったそうです。ただ、それは 2 人いた管理職ポストが 1 人に減らされたということで、研究に必要なライブラリアンの数は維持されています。そして、今までに大学にはなかった分野の研究室ができた場合には、その分野の研究に詳しいライブラリアンが新たに雇用されるそうです。積極的に研究をサポートする機関である米国のリサーチ・ライブラリーと、「本の置き場所」として認識されがちな日本の国立大学図書館の違いもあるのかもしれません。日本が世界に通じる研究成果を出していくためには、大学図書館の役割を拡大していくこ

とが必要ではないでしょうか。

最後に、バークレー校の石松さんとお別れするときに、「ライブラリアンはたとえ仕事が忙しくても、つねにリラックスしていなさい。」とアドバイスをいただきました。何故なら、ライブラリアンは利用者のサポートをする存在であり、利用者が必要な時に気楽に質問できる雰囲気を作っていなければいけないからです。利用者が声をかけるのをためらうような顔をしていてはいけないのです。「忙しい」が口癖になっていた自分を大変反省した次第です。